

コロナ禍が生んだ新しい見守りシステム

—金沢医科大学「コミュニケーション・シート」の紹介—

○本田康二郎（金沢医科大学）

1. はじめに

金沢医科大学(以下、本学)では、2020年度よりそれまで運用してきた「コミュニケーション・シート」の仕組みを紙媒体から電子媒体に移行した。そのきっかけは、コロナ禍により在宅学習に取り組む学生たちの学習状況や健康状態を的確に把握できない状況が生まれたからであった。本発表の目的は、この電子化によってもたらされた効果がどのようなものであったかを報告することにある。

2. コミュニケーション・シートとは何か

2012年より、本学では金沢工業大学において開発された「一週間の行動履歴」という課題と同様のものを導入しようと試みた。この課題は、一週間のタイムマネジメント記録を学生に書かせ、これを生活指導の資料として活用する試みであった。またこの記録を作る過程で、学生に自らの生活リズムを反省させることが目指されていた。

同じようなタイムマネジメント記録(本学での名称も「一週間の行動履歴」)を本学の初年次教育科目「大学基礎セミナー」で採用したが、間もなく学生からは「管理教育を改めて欲しい」とか、「プライバシーを教員に話したくない」という不満の声があがり、まじめに記録をとる学生が減少してしまった。

そこで、この取り組みが管理を目的としているのではなく、指導教員と学生のコミュニケーションを目指すものであることを説明し、タイトルを「コミュニケーション・シート」に変えて、内容も大幅に改定することにした。

「コミュニケーション・シート」では、「体調や気分」、「検温のとりくみ」、「睡眠」、「食

欲」、「学習状況」、「ストレス」の各項目についてアンケートをとり、最後にメッセージ欄に所感や反省などを書かせる。シートをこのような内容に改めてから、学生の回答率もほぼ100%になり、指導教員とのコミュニケーションが促進された。

3. コロナ禍により電子化へ

この「コミュニケーション・シート」は「大学基礎セミナー」で運用され、講義中に紙媒体のシートが配布されてきた。初めの目的はチューターと学生とのコミュニケーションを図ることにあつた。

ところが、コロナ禍によって大学への登校が禁止されたため、このシートの配布が不可能となり、学生の様子をつかむ術がなくなってしまった。

この状況を打破するために取り組んだのが「コミュニケーション・シート」の電子化であった。電子化の最大のメリットは、スマートフォンの普及率が100%になっている本学の学生に対して、在宅のまま学年全体に同時にシートを配布できることにあつた。

本学がGoogle社と契約し、全学生と教員に大学専用のGメールアカウントが配布され、グーグル・クラスルーム(以下、Gクラスルーム)が使用可能となったため、これを用いて「コミュニケーション・シート」を配布することにした。シートはグーグル・フォームによって作成された。Gクラスルームの利点は「配信予約」を設定できる点にあり、配信を担当した教員は複数のシートを作成して、あらかじめ予約を入れておくことで、配信の負担が大幅に軽減された。

4. 電子化の効果

さて、ここからは「コミュニケーション・シート」の電子化によるメリットを挙げていくことにする。

紙媒体の頃に比べて、われわれが得た最大のメリットは二つあった。一つは、電子媒体を活用することで教員と学生のコミュニケーションが促進されたこと、もう一つはアンケート結果の自動集計により教室全体の学生の状況が簡単に把握できるようになったことだった。

指導教員は学生の書いてきたコメントに対して、Gクラスルームの返信機能を用いた迅速なリプライが可能となり、両者のコミュニケーションが促進されたといえる。また、個別シートをプリントアウトすることで、学生の生活指導の基礎資料をファイリングすることが容易になった。

シートが電子化されたことで回答の集計が可能となり、学年内の回答分布が一目瞭然と分かるようになった。紙媒体の頃は、シートのアンケートは学生とチューターとの一対一のコミュニケーションにのみ活用されてきた。これに比べて、自動集計の効果は大きく、全体を統括する学年主任・副主任にとって貴重な資料が提供されるようになった。各学生が述べたコメントをすべて閲覧できるため、学生のニーズや不安を具体的に把握できるようになったことが大きな変化である。

さらに、この集計結果を週ごとに時系列で並べることで、学年全体の修学意欲や体調の変化を目で追うことも可能になった。

そして、シートの未提出や要注意のコメントがみつかった時は、すぐに指導教員と連絡をとり、問題を抱えた学生を簡単に見つけることが可能になったのである。

例えば2022年度には、ある学生のSNSへの不適切投稿について、シートのコメント欄で複数の指摘があがり、即座に問題を発見して対応することが出来た。

5. シート運用の課題

前章だけを見れば、良いこと尽くめのように見えるがそうではない。このシートは運用上の課題を抱えている。最後にそのことを指摘しておきたい。

各学生にとって、コミュニケーション・シートは指導教員に宛てて書きたいいわば簡単な手紙である。そして、指導教員がこれにコメントを返すことで両者のコミュニケーションが促進されていく仕組みである。

ところが、電子化によってクラス全体の情報が自動集計されるようになり、各教員がクラス全体の情報を把握できるようになった。つまり、一定の操作をすれば指導学生以外の情報も閲覧できるようになってしまったのだ。このことが運用上のトラブルを生み出すことがある。シートの電子化を行うに当たっては、十分なFD研修が必要であったはずだが、コロナ禍の緊急事態の中で急ごしらえのシステムを構築したため、不要な教員間のトラブルを生み出す場面を作ってしまった。これが大きな反省点である。

6. まとめ

コロナ禍が終わった現在でも、「コミュニケーション・シート」の運用は紙媒体に戻されることなくそのまま続けられている。現在は、情報の閲覧権限を学年主任・副主任に集中することで、大きな問題もなく運用されている。運用に細心の注意を払えば、大きなメリットが得られることは明らかである。

また当初、初年次学生を対象とする「大学基礎セミナー」でのみ運用されてきた一般教育機構のシステムではあったが、このシステムに医学部の教務委員会が注目した。一部の医学部教員が、全学年の指導教員制度の中にこのシステムを移行させようと動いている。

本学の初年次教育において運用した「コミュニケーション・シート」は、紆余曲折を経ながらも、「コロナ禍が生み出した大きな遺産」となっていきそうである。